

団長の心のものさし

W杯サッカー
に見る感動
そのわけとは

頑張れ！合唱団よ
楽しさを謳歌せよ

なぜ合唱ではこれほどの感動が生まれないのだろうか？心底楽しんでいるだろうか？巧く歌おうと小手先で勝負していないだろうか？スポーツと同じで、表現のための技術の向上を目指さなければならない。そこを“楽しみ”のために歌っているのだから...と理由付けして、苦労や努力を避けているのではないだろうか？

実は、楽しむには努力が要ることを意外と理解されない。楽しんでいるからこそやり抜くことができるのではないだろうか？だからこそ並みではないパフォーマンスを見せることが可能になり、それが人々に感動や魅力を与えることになるのである。

私たちの合唱活動も、正に意識を変える時代に差し掛かっていると感じる。個人の技量の向上はもちろん、合唱団としてのチームプレー、アンサンブルを徹底的に追求しなければならない。音は取れているから...などは話にならない。

並みではないからこそ感動を呼ぶ

今、巷の話題はW杯サッカーだろう。岡田ジャパンの快挙、躍進がその要因の一つだろうが、日頃、Jリーグの試合を見ているにも興味がわかなかった人たちも、W杯には大きな魅力を感じていることだろう。世界の強豪が国の威信をかけて戦うのだから、一勝する意味は大きい。オリンピック然り、夏の甲子園でもそうだ。

一流といわれるものには並みではない力が潜んでいる。この“並みではない”ということが、他を寄せ付けない力を持ち、見る人に感動を与えるのである。想像のつかない、予想できないことを、いとも簡単にやってのける。その実力を裏付けるのが、並々ならぬ努力なのだろう。試合の際に見せるパフォーマンスは、その氷山の一角に過ぎないのである。まだ、それを見せることが出来ればマシだ。それが現実なのだ。

楽しむことこそ底力だ

そんな高度なパフォーマンスを見せる強豪の中でも、ゲームを楽しんでいるチームがある。それがマラドーナ監督率いるアルゼンチンだ。

彼らの戦いぶりを見ていると、まるで子供がボール遊びに興じている

姿そのままだ。おそらくどの国の選手も、そのほとんどが子供の頃からサッカーに憧れ楽しんだのだろう。その中で、その姿勢を貫き通しているゲーム展開を見せているのがアルゼンチンだと思うのだ。「勝ち=楽しみ抜く」...これは完全に同じではないだろうが、少なくとも楽しみ抜くことが、結果として勝利を手に出ると感じる。そしてそれは単なる勝ち負けの問題ではないのだとも言えるだろう。サッカーに対する愛着、愛情の深さを意味しているように思う。だから見ていて爽快感が残るのだ。この底力を備えている意味は何事にも大きな影響を与えるのだ。



相国デンマークには、悪魔のボールと称賛された

うたおにの6月24日(木)の様子

練習内容
TO THE MOTHERS IN BRAZIL
YAI SAMANENA
ねがい
Heal The World

演奏に“段取り”が必要なものもないわけではない。しかし、そのほとんどが即興性に依存している。アンサンブルは“決め事の再現”ではないからだ。百歩譲って、どうしてもニュアンスや雰囲気に分らなければ、今のこの時代、どんな方法でも調べることが出来る。いつもいうように、すべて、自発性ありきだと思おうが...

もっと楽しんで本物を目指す

形だけのパフォーマンスはどこでも見られる。それほどレベルは上がっている。しかし本物ではない。これからの合唱の世界の隆盛は、メンバー一人一人が自分で判断し、“もっと楽しんで”歌うことにかかっている。楽しんで歌っていれば、もっと楽しみたくなる。見たことや聴いたことのない世界に行ってみたくなるはずだ。そのためには、“並みではない力”を持たなければ実現できないことが、きっと分かるだろう。